

2. 19 世紀後半のロシア・イギリス製アジア地図と中俄交界全図

大坪慶之（三重大学）

0. はじめに

19 世紀後半、清とロシアの間では国境画定交渉が断続的に行われる。その際、清側は精確な地図を持たなかったため、地理情報の差をうめるべく、多くの地図が収集される。1880 年代から 90 年代になると、在外公使が西洋製地図を利用して翻訳図を作るようになる。そのような地図の一つに、「中俄交界全図」がある。これは、洪鈞がロシア・ドイツ・オーストリア・オランダ四か国の公使在任中にロシア製地図を参照して作製し、1890 年に出されたものである。これについて筆者は、前稿において、依拠した地図に (A) 1884 年製の「亜細亜俄図」、(B) 1877 年製の「土爾吉斯坦図」の二種類が存在することを、漢籍史料から明らかにした。そして「中俄交界全図」は、(A) を拡大・模写し、(B) を参考に (A) に書かれた地名を翻訳・網羅したものであると指摘した [大坪 2022:16]。

これを受けて 2022 年 8 月 29 日～9 月 11 日に、アメリカ議会図書館（以下、LC とする）にて調査を行った。調査にあたっては、「中俄交界全図」の原図を実見することを目的とし、加えて同時代の関連する地図を閲覧・収集した。本稿では、これらのうち重要なものを、オンラインカタログ未掲載のものも含め紹介し（2023 年 2 月 10 日時点）、「中俄交界全図」との関係を中心に考察することとしたい¹。

¹ 「中俄交界全図」については、LC 所蔵のものが、ホームページで公開されている。また、林 2014:362-363 の解説も併せて参照。LC の

1. ロシア製地図と中俄交界全図

(1) トルキスタン軍管区図

ロシアでは、1860 年代の大改革により、それまでの軍団に代わり軍管区制が導入され、総督がその司令官を兼ねるようになる。1867 年、中国西北の境界地域を中心にトルキスタン総督府が成立し、初代総督に K.P.フォン・カウフマンが就任する。彼は 1871 年に、中央政府の許可を得ることなく回民の反乱で混乱する清朝治下のイリ地方を占領する [松里 2008:298-299/315-316]。その後、清朝は陝甘総督の左宗棠に命じて新疆計略を進め、1877 年までにイリ地方を除く新疆全域を回復する。そして、残された同地方の問題を解決するため、崇厚を全権大臣としてロシアとの交渉に臨むことになる [坂野 1973:326-327]。

このような時期のイリ地方を含む地域を対象とするロシア製地図が、LC に収蔵されている。整理時に付けられたタイトルは“Karta Turkestanskago voennago okruga”（以下、「トルキスタン軍管区図」と呼ぶ）である（後出の図 1・表 1 参照）²

この地図は、ペテルブルク基準で東経 16～64 度（グリニッジ基準：東経 46～94 度）、北

ホームページアドレスは、次の通り（最終閲覧日：2023 年 2 月 10 日）。

<https://www.loc.gov/maps/?dates=1800/1899&fa=segmentof:g7821fm.gct00255/&sb=shelf-id&st=gallery>

² オンラインカタログで検索できるが、画像は未公開である（2023 年 2 月 10 日時点）。

緯 28～52 度を対象に描かれ、縦横各 4 幅の計 16 幅で構成されている（インデックスマップあり）。また、縮尺は 1 インチで 40 ヴェルスタ³を表示している（168 万分の 1）。1 幅の紙の大きさは同じで、縦 59.0cm×横 60.2cm、図郭の内側は縦 45.5cm×横 48.1cm である。図法は正距円錐図法で、中心線はペテルブルク基準で東経 40 度（グリニッジ基準：東経 70 度）となっている。印刷はカラーでなされ、湖・河川は水色、低湿地（塩水）は青系統の斜線、砂漠は赤茶色の点々で表現されている。山は茶色の濃淡とケバで高低差と地形を表している⁴。

これに関して金窪氏は、19 世紀のロシアでは三角測量・平板測量を経て、半露里 1 インチ図（21,000 分の 1）、さらに 1 露里 1 インチ図（42,000 分の 1）を作った際の方法を示している。そこでは、主要道路・河川・県界のみ器械で、他は目測で記入された。また、地形は地点の傾斜量を角で示す記号を伴った概略の曲線で表現され、器械によって山頂や山間低地の輪郭だけを記入し、それを室内でケバ式に製図していたと指摘している。そしてペテルブルク以東の地域では、ヨーロッパロシアの地図が等高線になっていく 1870 年代以降も、このような状態が続いたという〔金窪 1969:10、金窪 2010:11〕。これらから、本図は 19 世紀を通じてロシアが採用してきた 1 露里図などと同じ方法で作られたと推測できる。

その他の特徴として、境界線が挙げられる。本図では基本的に一点鎖線で引かれており、国境を示す太い黒色で点を「(・)」にしているも

のから、より下位の区画を表す白抜きの同じものの、黒色で括弧の装飾のない一点鎖線、細い黒の一点鎖線と 4 種類がある。

(2) アジアロシア図

LC には、中央アジアからシベリア方面を対象とするロシア製のアジア図が 3 種類 4 セット所蔵されている。タイトルは「КАРТА АЗИАТСКОЙ РОССИИ」(Karta Aziaskoi Rossii。アジア部のロシアの地図。以下、「アジアロシア図」と呼ぶ)で、いずれも 1884 年の測量に基づいた地図に修正を加えたものである(表 1 参照)。これらは基本的に I～VIII までの地図⁵に張り出し図 2 枚を加えた計 10 枚で構成され、ペテルブルクを基準に西経 16 度～東経 166 度（グリニッジ基準：東経 14 度～西経 164 度）、北緯 24～80 度という広範囲を、縮尺 420 万分の 1（1 インチ＝100 ヴェルスタ）で描いている。また、図法は正距円錐図法で、東経 66 度（グリニッジ基準：東経 96 度）を中心としている。以下では、各図を順番に見ていこう⁶。

⁵ I～VIII までは、それぞれ 4 枚の紙を張り合わせて 1 枚の地図にしている。

⁶ 本節で扱う 4 セットの地図は未登録のため、オンラインカタログでは検索できない。なお LC では、①と同内容と思われる地図の画像が「Karta Aziatskoï Rossii s prilēgaiūshchimi k nei vladeniiāmi」として公開されている。これには、I～VI の 6 枚と張り出し図 1 枚が含まれている（IV に「КЪIV」を張り合わせている）。各図は、分離されたままで四方に図郭と余白を残しているが、VII・VIII が欠けている関係で初版もしくはどの段階の修正版かを示す情報が無い。そのため、今後詳細に検討する必要がある。ホームページアドレスは、以下の通り（最終閲覧日：2023 年 2 月 10 日）。

<https://www.loc.gov/item/2018693919>

³ 帝政ロシア時代の長さの単位(versts)で、「露里」と訳される。1 ヴェルスタの長さは、1.067km である〔金窪 2010:9-10〕。

⁴ 本図の説明にあたっては、以下の部分も含め、LC での整理時に鉛筆で地図中に書き込まれた英語訳も参考になっている。

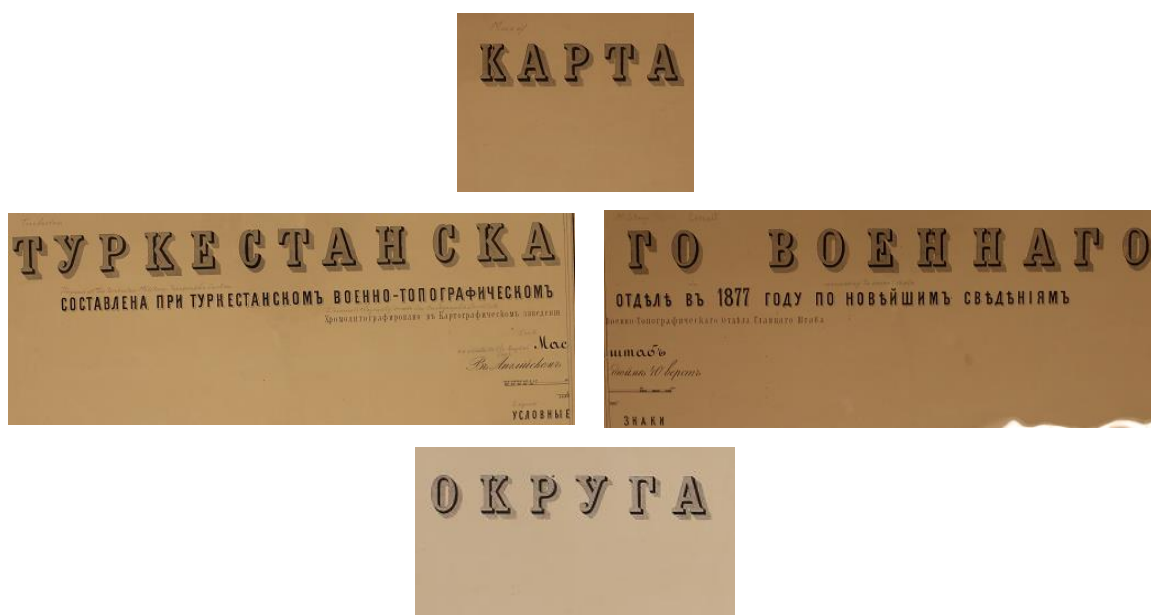


図1. トルキスタン軍管区図のタイトル部分拡大（左から順に配列）

表1. ロシア製地図

タイトル	作製年 (修正年)	作製機関	サイズ (cm)	縮尺	経度（ペテルブルク基準） 緯度	備考
КАРТА ТУРКЕСТАН- СКАГО ВОЕННАГО ОКРУГА	1877	ТУРКЕСТАНСКО ВОЕННО-ТОПОГРАФИ- ЧЕСКОЕ ОТДѢЛѢ	236.0 × 240.8	168 万 分の1	16E-64E 28N-52N	16 分割 LCCN: 95-684138
КАРТА АЗІАСКОЙ РОССІИ	1884 (1891)	ВОЕННО- ТОПОГРАФИЧЕСКОЕ ОТДѢЛѢ	148.9 × 202.2	420 万 分の1	16W-166E 24N-80N	本文① 1 枚
КАРТА АЗІАСКОЙ РОССІИ	1884 (1895)	ВОЕННО- ТОПОГРАФИЧЕСКОЕ ОТДѢЛѢ	148.8 × 201.4	420 万 分の1	16W-166E 24N-80N	本文② 1 枚
КАРТА АЗІАСКОЙ РОССІИ	1884 (1895)	ВОЕННО- ТОПОГРАФИЧЕСКОЕ ОТДѢЛѢ	147.0 × 202.0	420 万 分の1	16W-166E 24N-80N	本文③ 4 分割+2 枚
КАРТА АЗІАСКОЙ РОССІИ	1884 (1895)	ВОЕННО- ТОПОГРАФИЧЕСКОЕ ОТДѢЛѢ	148.6 × 206.0	420 万 分の1	16W-158E 24N-80N	本文④ 2 分割 8 枚

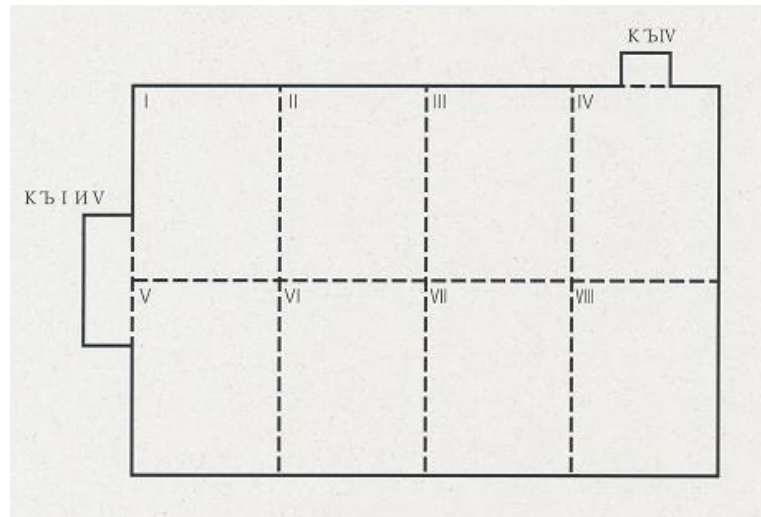


図2. アジアロシア図の配置（筆者作成）

① 1884年測量、1891年修正の地図

10枚を張り合わせて1幅の大きな地図にしている（図2参照）。張り出し部分を除く紙の大きさは、縦148.9cm×横202.2cm、図郭の内側が縦141.8cm×横194.4cmである。張り出し図はIVの上部に「КЪ IV」、IとVの左部にまたがる形で「КЪ I И V」と2か所ある。前者は図郭の内側が縦15.1cm×横29.1cm、後者は図郭の内側が縦41.3cm×横11.2cmである⁷。この図では、VIの下方（ペテルブルク基準で東経60～62度）において、図郭へと突き出す形で河川や湖が書き足されている（図3）。これが1891年段階でのものか、それ以前のものかは判然としないが、1884年の初版に修正を加えた部分と推察される。

境界線は基本的に緑色で引かれているが、国境線には影を付け（図5）、国内においても上位の行政区画の境界線を濃い緑色にするなど、変化をつけている。また、海や湖は薄い水色、山は茶色に着色されている。

⁷ 紙としては余白部分に重なっている関係で、前者が縦14.8cm×横37.0cm、後者が縦48.9cm×横11.2cm突き出している。

② 1884年測量、1895年修正の地図（その1：1枚に張り合わせた図）

この地図は、基本的に①と同じ構成になっているが、VIの下部にあった図郭へはみ出す部分が、ペテルブルク基準で東経56～64度近辺まで東西に拡大するなど、修正が加えられている（図4。同じ部分の図3も併照）。張り出し部分を除く紙の大きさは、縦148.8cm×横201.4cm、図郭の内側が縦141.0cm×横194.7cmである。①と同じく、IVの上部に「КЪ IV」、IとVの左部にまたがる形で「КЪ I И V」と番号のふられた張り出し部分が2か所ある。前者は図郭の内側が縦15.2cm×横29.1cm、後者は図郭の内側が縦42.0cm×横11.2cmである⁸。

着色の仕方は①とほぼ同じである。違いとしては、色褪せしていて分かりにくいのが、山の高低差をケバ式で表している。また、パミール方面の国境は、1891年修正図の段階にはなかった線が引かれている（図5・図6）。

⁸ 紙としては余白部分に重なっている関係で、前者が縦14.9cm×横36.2cm、後者が縦48.1cm×横11.7cm突き出している。

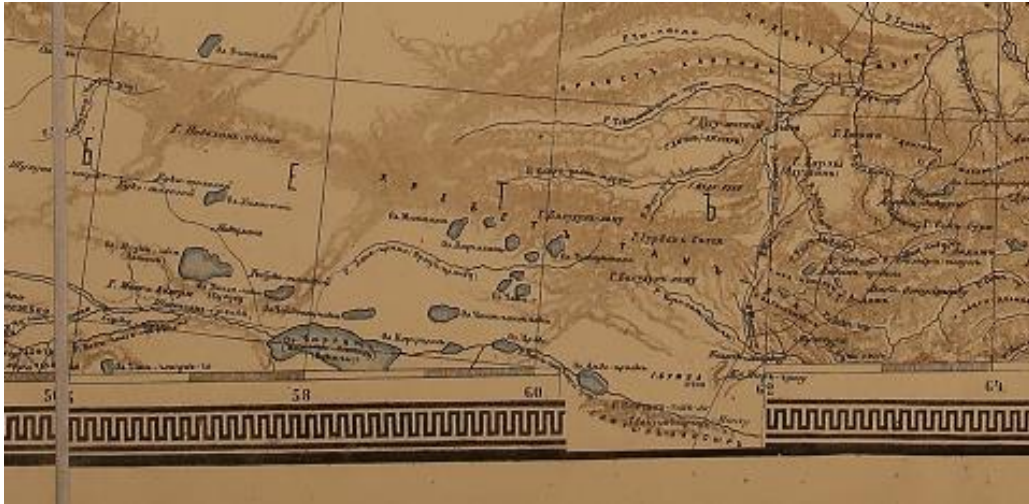


図3. アジアロシア図①1891年修正図VI下部

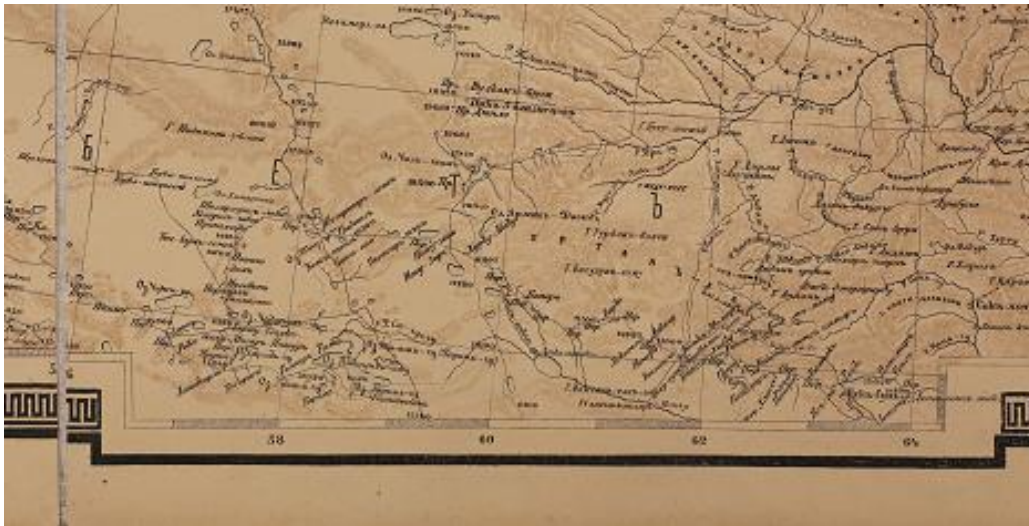


図4. アジアロシア図②1895年修正図（その1）VI下部



図5. アジアロシア図①1891年修正図のパミール国境



図 6. アジアロシア図②1895 年修正図のパミール国境



図 7. アジアロシア図④1895 年修正図のパミール国境

③ 1884 年測量、1895 年修正の地図（その 2：4 分割+張り出し図 2 枚）

②の I～VIIIの図を 2 枚ずつ張り合わせて 4 分割の地図とし、張り出し図も切り離したままに

なっている。全体的に破損しているため不明瞭な部分もあるが、内容は類似している。構成と大きさは次の表の通りである。

表2. 1884 年測量・1895 年修正地図（4 分割）の内訳

図の番号	紙の大きさ（縦×横）	図郭の内側（縦×横）	備 考
I・II	73.6cm×101.4cm	71.2cm×96.8cm	
III・IV	73.4cm×100.6cm	70.0cm×96.8cm	
V・VI	73.4cm×99.8cm	70.2cm×96.8cm	
VII・VIII	73.3cm×100.6cm	70.3cm×97.2cm	損傷が激しい
К Ъ IV	18.6cm×36.6cm	14.9cm×29.2cm	
К Ъ I И V	48.8cm×15.3cm	41.7cm×11.7cm	

④ 1884 年測量、1895 年修正の地図（その 3：2 分割）

各図は、「I・II・V・VI」と「III・IV・VII・VIII」をそれぞれ張り合わせ、左右 2 分割の地図にできる状態になっている（LC では、I～VIII を切り離して保存）。また、張り出し図は二つとも失われている。②とは異なり、II・VI の右側と III・VII の左側にも図郭があることから、1895 年の修正図はもともと四周に図郭を持ち、張り合わせに際して接合部分を切り落としていることが分かる。内容は②および③とよく似ているが、バミール方面の国境を赤系の線で修正・表示し、ロシア国内の境界も一部変更されている（図 7）。サイズは左右ともに同じで、紙の大きさが縦 148.6cm×横 103.0cm、図郭の内側が縦 140.8cm×横 95.6cm である。そして描く範囲は、張り出し部分がない関係で、東側部分がペテルブルク基準で東経 158 度までとなっている。

（3）中俄交界全図との関係

1877 年製「トルキスタン軍管区図」は、「中俄交界全図」の原図「土爾吉斯坦図」と比べて、出版年は一致するが名称は一部異なっている。しかし、漢籍史料に「西暦七十七年（実際は 1877 年。略称に従う）の土爾吉斯坦図は、北は北緯 52 度から南はチベットの中中部まで、モンゴル・新疆の境界を描く」と対象範囲を示した記述が

見られる⁹。これは「トルキスタン軍管区図」が描く地域と一致している。したがって、本図が「中俄交界全図」の原図と判断できる。

一方、4 セットの「アジアロシア図」は、名称・最初の測量年が「亜細亜俄図」と一致する。また、同じく漢籍史料に「八十四年の亜細亜俄図は、東三省からカシュガルまで、中国・ロシアの全段の境界は全て備わっている」と書かれており¹⁰、その範囲は LC の「アジアロシア図」修正版に含まれる。これらから、1884 年作製の初版が「中俄交界全図」の原図として模写した「亜細亜俄図」であったと考えられる¹¹。初版は現段

⁹ 原文は「西暦七十七年（実一千八百七十七年。従省称也。）土爾吉斯坦図、北起緯五十二度、南至後藏、繪蒙古・新疆交界」である〔「光緒勘定西北辺界俄文訳漢図例言」『許文肅公遺稿』巻十一、雑著、二葉裏（沈雲龍（主編）『近代中国史料叢刊』第十九、文海出版社に所収）〕。なお、（ ）は原文にある註であることを示す。

¹⁰ 原文は「八十四年亜細亜俄図、度自東三省至喀什噶爾、中俄全段交界皆具」である〔前出「光緒勘定西北辺界俄文訳漢図例言」〕。なお、当時の清では、ロシアとの全国境についてキャフタを境に東段（5 段）と西段（9 段）の計 14 段に分けて認識しており、それは鄒代鈞『中俄界記』の構成などにも表れている。

¹¹ 中心とする経線はずれているが、両図とも円錐図法で描かれていることも、その傍証となる

階では未見であるが、1891 年版から 1895 年版にかけての修正はそれほど大きくない。また、タイトルの下部に 1884 年の文字が一貫して残っている。ゆえに、初版と修正版の差は著しいものではなく、「中俄交界全図」との比較・検討が一定程度可能と思われる。そこで以下では、原図として使用された範囲と国境線について考察しよう。

まず使用された範囲であるが、「中俄交界全図」は、ペテルブルク基準で東経 27～119 度 北緯 32～63 度近辺を描き、中心は同東経 75 度辺りになっている。これは、「アジアロシア図」でいうと、Ⅵ～Ⅷの大部分と、Ⅱ～Ⅳの下の方にあたる（図 2 参照）。一方、先行研究はどの番号の図が使われたかは明示していないが、「中俄交界全図」右上にある洪鈞による説明を根拠に、基になったロシア図は 4・5 幅で、かなり拡大されていることを指摘している¹²。そして「中俄交界全図」の大きさは、「アジアロシア図」をはるかに上回っている¹³。以上から、「中俄交界全図」が拡大・複製に利用したのは、「アジアロシア図」の東側 6 幅分であるが、Ⅱ～Ⅳは南側の一部に限られるため、洪鈞は同等の範囲として「4・5 幅」と説明したと推察される。

次に、国境線に関して、両図で大きく異なる部分に、パミール地方がある。1890 年作製の「中俄交界全図」では、同地方の国境線は赤色で明示されている。これに対し、1891 年修正版「アジアロシア図」では境界は引かれていない¹⁴。し

う。

¹² 陳 2014:120-121。説明の原文は「原図寛広僅四・五幅、今摩絵之展成三十五幅」である。

¹³ 「中俄交界全図」は、毎幅が縦 42cm×横 53cm、張り合わせると縦 169cm×横 315cm である [林 2014:362]。

¹⁴ 図 5 参照。なお、1895 年の修正版は当該地方の国境を表すようになるが、「中俄交界全図」と

たがって、当該地方の国境は、1884 年の初版にも存在しなかった可能性が高い。他方、「トルキスタン軍管区図」に太い黒の一点鎖線で表される国境線と比べると（後出図 9）、「中俄交界全図」のそれは類似した形状である。また許景澄は、「洪図〔中俄交界全図一筆者註〕の境界線はもともと七十六年のロシア図」に拠っていると記している¹⁵。これらから、洪鈞は「アジアロシア図」を模写した地形に、「トルキスタン軍管区図」の国境線を入れていたことが分かる。

ただし両者の国境線が完全に一致するわけではなく、「トルキスタン軍管区図」にある白抜きの一点鎖線など別の境界線と「中俄交界全図」の国境線が合う部分もある。そしてこの差異は、清側に有利な国境の位置になっている。以上から、洪鈞は「中俄交界全図」を作製するにあたり、複数のロシア図を参照しているが、異なる情報がある場合は自国に望ましくなるような取捨選択も行っていたと考えられる¹⁶。

は形状が全く異なっている。

¹⁵ 原文は、「洪図界線、本七十六年俄図」である [『許文肅公日記』一卷、日記、34 葉裏、光緒十九年癸巳（1893 年）二月初二日（沈雲龍（主編）『近代中国史料叢刊』第十九、文海出版社に所収）。なお、出版年が 1876 年となっているが、許景澄は別に記した総理衙門への書簡中で、「西曆七十七年土爾吉斯坦図」に注釈をつけて「即新訳帕図叙例所称七十六年回部図」としているので、同じ地図を指していると考えられる [前出『許文肅公遺集』卷七、函牘三、四十三葉裏、光緒十九年六月]。

¹⁶ 「中俄交界全図」と原図の間には、地名翻訳の問題もある。これに関しては、「トルキスタン軍管区図」を参考に、「アジアロシア図」に書かれたものを網羅していたという漢籍史料の記述もふまえ [大坪 2022:16]、各図を詳しく比較・検討する必要がある。

表3. イギリス製合同作製地図と *Science* 誌掲載地図

タイトル (版)	作製年 (印刷年)	作製機関	サイズ (cm)	縮 尺	経度・緯度	備 考
TURKESTAN (Third Edition)	1875 (1875)	Survey of India	119.6 × 188.4	2,027,520 分の 1	48E-86E 29N-47N	1885 年に米で再印刷 4 分割
TURKESTAN (Fourth Edition)	1878 (1879)	Survey of India	129.8 × 178.5	2,027,520 分の 1	48E-86E 28N-48N	4 分割
TURKESTAN (Sixth Edition)	1882 (1883)	Survey of India	136.0 × 197.4	2,027,520 分の 1	48E-86E 28N-48N	4 分割
Map of central Asia on the basis of the surveys made by British and Russian officers to 1881	1885	不明	58.0 × 60.0	2,534,400 分の 1 (1 インチ = 40 マイル)	59E-75E 29N-42N	1 枚 <i>Science</i> 誌に掲載 正距円錐図法 (東経 67 度が中心)

2. イギリス製の英露合同作製地図

(1) トルキスタン図

LC には、「TURKESTAN」と名付けられた、英露両国が合同で作製したインド北方のトルキスタンを対象とする地図が複数所蔵されている¹⁷。これらは修正を加えつつ版を重ねたもので、全て同じタイトルを持つ。正式名称は「TURKESTAN/ AND THE COUNTRIES BETWEEN/ the British and Russian Dominion in Asia」(「/」は改行を示す。以下、「トルキスタン図」と呼ぶ)、縮尺は 2,027,520 分の 1 (1 インチ=32 マイル) である。地名などの情報は英語で書かれ、それぞれが全 4 枚で構成されている (左上・右上・左下・右下の順にシート 1～4 の番号がふられる)。また図法は、東経 67 度を中心とした正距円錐図法が用いられている。LC が所蔵する地図のデータは、表 3 の通りである (東経はグリニッジ基準)。

¹⁷ これらの地図は未登録のため、オンラインカタログでは検索できない。

i) Third Edition (第 3 版)

もともと 1875 年に修正・印刷された地図を、The office of the Chief of Engineers U.S. Army (アメリカ陸軍工兵隊のトップのオフィス) が 1885 年に再印刷したものである¹⁸。LC では、4 枚を張り合わせて 1 枚にできる状態の地図を切り離して保存しており、紙の大きさは各シート縦 59.8cm×横 94.2cm である¹⁹。切り離しに際しては、緯度や中心の経度に合わせるのではなく、東経 67 度のやや東と北緯 38～39 度付近を、紙の辺と平行に直線で分離している。

¹⁸ 後述するように、第 6 版には販売価格が記載されているので、第 3 版も販売されており、それをアメリカ軍が入手し利用した可能性を指摘できる。

¹⁹ 4 枚を接合する際に重なる辺の余白は非常に小さいため、製図の段階からあったものではなく、印刷技術の関係でできたものと思われる。

図郭の情報によると、1875 年の修正はイギリス・ロシア双方のオフィサー（officers）による測量に基づいている。原図の編集はイギリスの大佐ジェームズ・トーマス・ウォーカー（J. T. Walker／インド測量局大三角測量部の長官）の命令のもと行われ、デーラドゥン（Dehra Dun）の測量局で 1875 年に写真亜鉛凸版で印刷されている²⁰。印刷はカラーでなされ、湖沼・河川を水色、境界線を赤色にしている。また、山などの高低差はケバで表現されている。実際の編集は G. W. Atkinson があたり、J. Peyton と E. F. Litchfield により山に陰影がつけられている。そしてシート 4 には、「このシート上に小さな円で示される全ての山頂の位置は、大三角測量によって定められている」とあり、インド大三角測量の成果が反映されていることが分かる。

各シートでは、「このシートの編集において参照した典拠」として、基になった地図や調査・探検を列挙している。それらは、イギリス・ロシアの双方からほぼ同数採用され、1860～70 年代と修正直前のものが多くなっている。また、この傾向は版を重ねても変わらない。これらの点は、いわゆる「グレート・ゲーム」のもとで展開された英露対立の状況にあっても、一方では中央アジアという未知の土地に対して、1870 年代以来、両国が情報を交換するという協力関係にもあったことを示す事例となっている²¹。

²⁰ シート 3 の下部には 5 月、シート 4 の下部には 6 月とされている。なお、シート 1 とシート 2 には情報が記されていない。

²¹ ホップカークは、1890 年夏にロシア軍の大佐がイギリスのヤングハズバンドにパミールの地図を見せていたことを紹介しており、現地スタッフ間でも情報交換がなされていたことが窺える [ホップカーク 1992:338 等]。

ii) Fourth Edition (第 4 版)

イギリスとロシアのオフィサーによる 1878 年の測量に基づき、修正・印刷されたものである。4 枚のシートで構成され、LC でも別々の状態で所蔵されている。第 3 版とは違い、各シートが四方に図郭もしくは余白（接する側の二辺）を持ち、4 枚が接合する部分も正確に東経 67 度、北緯 38 度となっている。また切り離しも、この経度・緯度に沿ってなされている。紙は横の大きさが微妙に異なり、シート 1 が 64.9cm × 88.1cm（縦×横。以下同じ）、シート 2 が 64.9cm × 90.4cm、シート 3 とシート 4 が 64.9cm × 94.4cm である。陸軍少将となったジェームズ・トーマス・ウォーカー（インド測量監督、インド測量局大三角測量部の長官）の命により編集され、デーラドゥンで 1879 年に写真亜鉛凸版で印刷されている²²。印刷はカラーでなされ、湖沼・河川を水色にするほか、境界線を地域によって色を変えつつ着色している。また第 3 版同様、ケバで高低差を表現し、典拠も各シートに示されている。

内容に関する第 3 版との相違点としては、シート 1 とシート 2 の図郭に、ロシア帝国の南限について、「the Chromolithographed Map of the Turkestan Military Circuit, published by the Russian Topographical Department, 1877-78」に見えるものを複写したとある²³。つまり、ロシアとの国境を示すのに、多色石版印刷されたトルキスタン軍管区の地図で、1877～78 年にロシア地形測量部で印刷されたものに基づいていると

²² シート 1 は 2 月、シート 2 は 4 月、シート 3 は 3 月、シート 4 は 6 月に印刷と下部に記されている。

²³ この地図はシート 1～3 の図郭の典拠では、「Chromolithograph map of Turkestan Military Circuit by Russian Topographical Department; 1877」となっている。

いうことである。これらの情報から、本図が依拠したのは前章で検討した「トルキスタン軍管区図」と判断できる。一方で、実際に描かれた国境を比べてみると、パミール地方が大きく異なり、ロシア領が大きくなっている（図8・図9）。この背景には、外交交渉を有利に導くべく、地図作製時に両国の間で、どのような情報を出すかで駆け引きがあったことが推測される。

ロシア帝国の南限を表す境界線は、地図上では濃い緑色で表されている。また、アフガニスタンの領域を示す境界線は薄い紫色、ペルシアは濃い茶色になっている。加えて、イギリス・ロシア領域内の境界や主要なルートは赤色で表示される。

シート3の図郭には、ペルシア・アフガニスタン・バルチスタンの境界線の一部はおおよそ

のもので、最終的な測量はまだであるとの説明がある。またシート4にも、上記3地域に前年までに中国が東トルキスタンで獲得した土地（イリ事件後に奪還した地域）を加える形で同様の記述がある。ここから、イギリス・ロシア・清の三国が絡む国境画定交渉の成果や、インド測量局が新たに収集した情報を、改訂版を出すごとに反映させていく計画であったと考えられる。

実際の作業者については、複数で行われたことが分かる書き方になっており、編集は G. W. Atkinson が、山の陰影をつけるのは J. Peyton が主に担当している。そして各シートの右下に亜鉛版の作製者として C.G.OLLENBACH、写真担当として C.DYSON と書かれている。



図8. トルキスタン図第4版（1879年刊）のパミール国境



図9. トルキスタン軍管区図 (1877 年) のパミール国境



図10. トルキスタン図第6版 (1883 年刊) のパミール国境

iii) Sixth Edition (第6版)

イギリスとロシアのオフィサーによる、1882年の測量に基づき作製されている。4枚のシートに分けて保存され、四方に図郭・余白がある点と切り離し方は、第4版と同様である。また各シートは、東経67度・北緯38度で接合する。

紙の大きさは共通で、縦68.0cm×横98.7cmとなっている。第3・4版と同じく、陸軍中將に昇進したジェームズ・トーマス・ウォーカー（インド測量監督、インド測量局大三角測量部の長官）の命令で編集され、デーラドゥンの大三角測量部より全て1883年3月に写真亜鉛凸版で印

刷されている。ただし、亜鉛版作製・写真担当については、シート 1～3 は小文字で「C.G.Ollenbach, Zinco」「C.Dyson, Photo」とある一方で、シート 4 は大文字で書かれている²⁴。印刷はカラーでなされ、湖沼・河川を水色にするほか、境界線は赤色を基本に、特にロシアの南限を緑色に着色するなど強調している。この他、高低差をケバで表現し、典拠も全シートに記している。また、編集は G. W. Atkinson が、山の陰影は J. Peyton が主に担っている²⁵。

パミール地方のロシア国境については、第 4 版から大きく変わっている。そして、その形状は 1877 年の「トルキスタン軍管区図」に近くなっている（図 9・図 10）。一方、全シートの典拠では、「Chromolithograph map of Turkestan Military Circuit by Russian Topographical Department; 1881」となっている。つまり、本図が利用した「トルキスタン軍管区図」は、1881 年の修正版ということになる。ここから、1878 年から 1883 年にかけて、イギリス側の情報が更新され、同地域における国境の認識に変化が出てきていることが窺える²⁶。

第 4 版までと異なる他の点としては、次の四つがあげられる。一点目は、確定していない国境も示しているが、曖昧な部分は全ておおよそ

であると、注記されていることである。二点目は、1 セットの価格が表示されていることで、カラー版（700 ルピー）と白黒版（600 ルピー）の 2 種類があったと分かる²⁷。三点目は、現段階で意味するところは不明だが、「大三角測量部、デーラドゥン 18-5-83-600」と書かれていることである²⁸。四点目は、シート 3 に、ペルシアの標高は General A. Houtum Schindler の地図から取って示したものと説明されていることである。これは、典拠に「General A. Houtum-Schindler's Routes in South-Western and Southern Persia 1877 to 1880」とあることから、シンドラー²⁹が 1877～80 年にかけて行った南および南西ペルシアを調査した際の成果に依拠していると判断できる。

(2) *Science* 誌掲載地図と中俄交界全図

前節でみた「トルキスタン図」に関連する一枚ものの地図が、LC に収蔵されている。この図は本来、*Science* 誌 (Vol.5 No.117, May 1, 1885)

²⁷ LC で閲覧したのは、カラー版である。

²⁸ 以上の記載は、全てのシートに確認される。

²⁹ Houtum-Schindler, Albert (1846-1916)。ライプツィヒ大学卒業後、電信会社の技師としてペルシアに赴任、学者・ペルシア電信サービスの監督官などとして活動する。電信・採掘事業を監督するかたわら、広範囲を旅行して旅行記を記し、科学や地理学の雑誌などにも多くの論文を発表する。頻繁に領土を調査し、その正確な記録は、旅行した地域の地図作製に役立った。詳しくは、John D. Gurney,

“HOUTUM-SCHINDLER, ALBERT,”

Encyclopaedia Iranica, XII/5, pp. 540-543 の項目を参照。この項目は、以下のアドレスで参照できる（最終閲覧日：2023 年 2 月 10 日）。

<http://www.iranicaonline.org/articles/houtum-schindler-albert>

²⁴ この違いの持つ意味については、複数次印刷されている可能性などが想定されるが、現段階では不明である。

²⁵ シート 4 には、「このシート上に小さな円で示される全ての山頂の位置は、大三角測量によって定められている」との記載もある。

²⁶ 例えば、シート 2 の典拠に「Dr. A. Regel's map of a Journey in the Province of Darwaz given in Proceedings of the Royal Geographical Society for July 1882」とあり、旅行の成果なども影響したと思われる。リーゲルの調査旅行については、Regel1882 参照。



図 11. *Science* 誌 (Vol.5 No.117, May 1, 1885) 掲載地図

に綴じ込まれているものである（表 3・図 11 参照）³⁰。また本図については、同号において以下のように解説されている³¹。

今号に印刷されている地図は（この論文

³⁰ LC のホームページで画像が公開されている。アドレスは、次の通りである（最終閲覧日：2023 年 2 月 10 日）。

<https://www.loc.gov/resource/g7210.ct001159/>

³¹ *Science* Vol.5 No.117, May 1, 1885, p.356。

や他の論文に添えられている）、〔インド測量局の一筆者註〕大三角測量部の監督者のオフィスから発行されたものを基にしている。原図はイギリスとロシアのオフィサーらが 1881 年にアップデートした測量に基づき製図されており、デラドゥンで 1881 年 9 月に印刷された。縮小に際しては、40 マイルを 1 インチの縮尺で描いている。上部の赤い破線は、本図が複製した原図を作った際に論争中であつた領域の境界を描い

ている。そしてそれは、2 年前〔1883 年—筆者註〕にペテルブルクで入手可能であったロシア製スタッフマップ³²の最新修正版においても、同じ場所に正確に現れている。一方で下部の赤い破線は、極端なロシアの要求と思われており、本図が引用した原図には現れていないものを示している。

前半部分より、原図の発行者はインド測量局の大三角測量部の監督者オフィスであること³³、イギリスとロシアのオフィサーによる 1881 年の測量・修正に基づくこと、同年 9 月にデーラドゥンで印刷されていたことが分かる。また地図からは、高低差をケバで表すなど、製図方法が「トルキスタン図」の各版と似通っていることが窺える。これらと前節の内容を合わせると、本図は「トルキスタン図」の第 4 版と第 6 版の間に製図された第 5 版を基にしていると考えられる³⁴。

後半部分には、本図の作製にあたり手を加えた箇所が示される。まず縮尺は、1 インチ＝40 マイルに縮小されている。また、掲載号の特集に合わせて、境界が赤線で表される。そのうち係争中であったアフガニスタン北西部（ヘラートの北方）について、赤の破線が 2 本引かれ（図 11 真ん中やや左）、それぞれに説明がつけられている。また、原図より新しい 1883 年時点で入手可能であった別のロシア製地図を参照していることも分かる。

ロシアとの境界線については、パミール地方

を見てみると、1877 年の「トルキスタン軍管区図」と類似した赤線が確認される（図 11 右上）。すなわち、「トルキスタン図」第 4 版（図 8）とは違い、第 6 版（図 10）とほぼ重なるということである。ただし、第 6 版が典拠とした「トルキスタン軍管区図」は 1881 年のものであり、本図の原図と考えられる第 5 版の印刷と同年である。他方、本図が印刷されたのは 1885 年であるため、後から境界の赤線のみ変更することも可能である。したがって、第 5 版に描かれたロシア国境の形状が、前後どちらの版に近いのかを本図から確定することは難しい。しかし本図は、国際社会の興味を惹起する「グレート・ゲーム」に関する特集用という目的に合わせ、上下二本の境界線を赤色の破線で引くなど最新の情報を加味して作られた地図になっていると言えよう。

それでは、本図の国境線と「中俄交界全図」のそれとを比べると、どうだろうか。前者におけるパミール国境は、1877 年製「トルキスタン軍管区図」に近い形状をしている。つまり、*Science* 誌掲載地図の編集者は、1885 年段階で「トルキスタン軍管区図」の国境線の位置をロシアの南限と判断している。そして「トルキスタン図」第 6 版（図 10）から、イギリスはこの形の国境を遅くとも 1883 年には認識している。一方で先述したごとく、「中俄交界全図」は様々な情報を吟味しつつ、1877 年製「トルキスタン軍管区図」に依拠して当該地域の国境を書き足している。以上から洪鈞は、ロシア図を無批判に利用したというより、1880 年代前半から半ば頃の国際情勢を反映させた翻訳図を、1880 年代後半に作っていたと考えられる。

おわりに

本稿では、1870 年代から 90 年代にかけて作られた 2 種類のロシア図と、同時代のイギリス製の英露合同作製地図ならびに関連する地図を見てきた。そこではまず、各種のロシア図を「中

³² このロシア製地図が何を指すのか、現段階では不明である。

³³ 図郭にも、インド測量局の「大三角測量部により発行された地図から複写」と記されている。

³⁴ 前節で見た通り、第 6 版は販売されていた。したがって、第 5 版も販売されており、*Science* 誌の編集者はそれを購入して利用したと推察される。

「中俄交界全図」と比較し、漢籍史料と併せて検討した。その結果、洪鈞は後の弾劾につながるパミール国境を、「アジアロシア図」ではなく、「トルキスタン軍管区図」をもとに引いていたことが分かった。さらに国境全体を見渡しても、無批判にロシア図を写していたわけではなく、作製段階で様々な取捨選択がなされていたと考えられる。

次に合同作製地図からは、いわゆる「グレート・ゲーム」の中で、イギリス・ロシアが相互に地図や調査旅行の記録を参照し、新たな地図を作製することで情報共有していたという対立とは別の一面が看取される。これらの地図は、「中俄交界全図」の原図となった 1877 年製「トルキスタン軍管区図」、さらには 1881 年の修正版も参照している。一方で、1890 年作製の「中俄交界全図」は、1884 年の「アジアロシア図」を基本に、1877 年の「トルキスタン軍管区図」で補っている。以上の点は、「中俄交界全図」の地形や地名の情報が、1880 年代前半のイギリス・ロシアと同レベルであり、最新のものではないことを示している。また同時に、同じ「トルキスタン軍管区図」を利用しながらも、使う版の違い、別の地図や調査旅行の成果により、清とイギリス・ロシアとの間で情報の差が生まれていたことが分かる。

19 世紀後半に、イギリス・ロシアをはじめとする西洋各国が作った当該地域の地図は他にも数多く存在する。そして、清による西洋製地図の収集や翻訳図の作製は、1890 年代以降も続けられる。今後は、これらの地図を調査するとともに、清の翻訳図作製と地理情報の収集について検討することが課題となるだろう。

参考文献

大坪慶之 2022「19 世紀後半における清露間の国

境画定交渉と地図作製」『外邦図研究ニューズレター』13、pp.6-18。

金窪敏和 1969「ソ連邦における地図学の発達と最近の動向」『地図』7-1、pp.9-16。

金窪敏和 2010「ロシア軍による日露戦争戦場の地図作製」『外邦図研究ニューズレター』7、pp.9-27。

坂野正高 1973『近代中国政治外交史』東京大学出版会。

ホップカーク、ピーター（著）京谷公雄（訳）1992『ザ・グレート・ゲーム—内陸アジアをめぐるスパイ合戦—』中央公論社。

松里公孝 2008「プリアムール総督府の導入とロシア極東の誕生」左近幸村（編）『近代東北アジアの誕生—跨境史への試み』北海道大学出版会、pp.295-332。

Alder, G. J. 1963 *British India's Northern Frontier: A Study in Imperial Policy*, Published for the Royal Commonwealth Society by Longmans, London.

Hopkirk, Peter 1990 *The Great Game: On Secret Service in High Asia*, John Murray, London.

Regel, Albert 1882 'Dr. Albert Regel's Journey in Karateghin and Darwaz', *Proceedings of the Royal Geographical Society and Monthly Record of Geography*, vol.4 No.7(Jul., 1882), pp.412-417.

陳維新 2014「帕米爾界図及光緒時期中俄帕米爾界務交渉問題探討：以国立故宫博物院現蔵外交輿図為例」『故宮學術季刊』第 32 卷第 2 期、pp.117-168。

林天人（著）・張敏（英文編訳）2014『皇輿搜覽—美国国会図書館所蔵明清輿図—』中央研究院數位研究中心・美国国会図書館（再版）。